



# MoNo 変身図鑑

## 第37回 ハス

夏になると、池や沼の湖面を覆うように緑の葉とともに淡い花を咲かせるハス。地下茎はレンコンとして日本人になじみの深い食材だが、実は花や茎、葉もさまざまに利用できる用途の広い植物だ。また、仏教とかがわりが深く、特にアジアの国々では特別な存在の花でもある。

世界の熱帯、温帯に広く自生しているハス。原産地はアジア、エジプトなど諸説がある。日本にも古くから自生しているが、食用のハスは鎌倉時代に中国から伝わったとされる。写真は「大賀ハス」  
©世界文化フォト



茎を苛性ソーダで煮て繊維を取り出し糸に紡ぐ。実は花びらの中にある果托からとれる

**仏教とのかかわりが深い神聖な花**  
1951年、故大賀一郎博士は約2000年前の泥炭層からハスの種子を発見し、翌年、その一粒から「大賀ハス」と呼ばれるハスの花を咲かせることに成功した。2000年の時を越えて花を咲かせたハスの生命力は多くの人々に感動を与えた。ハスは日本人やアジアの人々にとって特別な存在の花だ。ハスの花の上に鎮座する釈迦の姿は仏画や仏像の普遍的なモチーフだが、仏教ではハスは神聖な花とされている。ハスは仏陀の生誕を告げて開花したとされ、極楽浄土はハスの池だと考えられている。インドやスリランカ、ベトナムなど、アジアにはハスを国花とする国もある。日本では死、葬儀をイメージさせる花だが、それももとをたどれば仏教の神聖なイメージからきたものだ。

**レンコン以外も余すところなく利用**  
日本でのハスの用途は、地下茎(レンコン)を食材として用いるのが一般的だが、アジアの国々では花や実から茶、葉までハスは余すところなくすべてが活用されている。例えばベトナムでは花や茎をお茶に入れて香りを楽しみ、葉はご飯を包んで蒸すのに使い、実はサラダやご飯に混ぜて食べる。カンボジアでは葉が草木染の染料、ミャンマーやタイでは茎が繊維の原材料にもなる。

あまり注目されていないが、レンコンはビタミンCと食物繊維、ポリフェノールを多く含む優良野菜でもある。ムチン質を多く含む、滋養強壮にも効果がある。同時に薬用にも利用され、日本の民間療法ではレンコンをすりおろしたしほり汁が鼻づまりやむくみ、せき止めに効くとされている。さらに、漢方では実やおしべには利尿作用、葉には解熱、利尿、止血作用があるといわれ、花から根までハスのすべてが使われているほどだ。

最近では化粧品や健康食品などにも使われており、活用はまだまだ広がっていきそうだ。

### 加工食品

レンコンを練り込んだめんやお菓子、葉のお茶、レンコンから作られた焼酎などが登場。油分の吸収を助けるリパーゼの働きを阻害するハスエキスはダイエットをサポートする健康食品にも使われている



### コスメ

コラーゲン減少の抑制や老化防止を目的に、総合保湿成分としてハスエキスが配合された化粧品も



### 紙

左下はハスの繊維100%で作られた運紙。ほかには牛乳パックにハスの繊維をすき込んだ和紙で作られたレターセット



### 玩具

ちりめんでカキや人形に見立てたお手玉。中にハスの実が入っている



### 織物

生糸を巻いたハス糸を横糸に使ったナボレナ運布(上)と、縦糸にハス糸、横糸に麻糸を使った加糸織



### アジア伝統の蓮布が復活?

茎は繊維に、葉は染料にと、東南アジアの国々では古くから伝統的な織物にハスが用いられてきた。日本にもかつてはハスの茎から採取した糸で織った蓮布織が存在した。しかし、安価で大量生産できる合成繊維が流入するようになると、こうした伝統織物は次々と姿を消していった。長期化した内戦の影響で伝統的な織物技術が失われてしまったカンボジアのような国もある。

そんな伝統織物を見直す動きが、近年各国で起きている。繊維・衣料産業が盛んなタイでは、タイシルクやオーガニックコットンに加え、ハスやヘンプなどの天然繊維の製品化に力を入れている。また、カンボジアでは日本のNGOなどの支援のもと、伝統織物の復活に取り組んでいる。ハスを用いた織物が日本に届けられる日も遠くないかもしれない。



NGO「幼い難民を考える会」の支援のもと、伝統織物の技術を学ぶカンボジアの女性